科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 26 年 5月 19日現在

機関番号: 1 7 1 0 2
研究種目: 挑戦的萌芽研究
研究期間: 2011 ~ 2013
課題番号: 2 3 6 5 0 3 2 7
研究課題名(和文)運動ニューロンの網羅的発現遺伝子解析によるリハビリテーション効率の定量化
研究課題名(英文)Identification of possible biomarkers for the efficient physiotherapy after the CNS injury.
研究代表者
岡田 誠司 (OKADA, SEIJI)
九州大学・医学(系)研究科(研究院)・准教授
研究者番号:30448435
交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,800,000 円 、(間接経費) 840,000 円

研究成果の概要(和文):これまでリハビリの効果判定とmolecular biologyを繋ぐ研究は数少なかった。我々は、核 ソーティングやレーザーマイクロダイセクションによる運動ニューロン選択的な解析技術と、次世代シークエンサーに よる網羅的解析を組み合わせることで、廃用あるいはリハビリがモーターニューロンに与える影響を遺伝子発現を指標 として定量化することを試みた。その結果、廃用により運動ニューロン数や細胞サイズに変化はなく軸索輸送蛋白や神 経伝達物質の発現は保たれていたが、興奮性シナプス蛋白の発現は遺伝子および蛋白レベルで低下していた。本解析法 は将来的にリハビリの効率評価となりうる指標の同定に繋がると考えられた。

研究成果の概要(英文): To quantify the efficacy of physiotherapy after the central nervous system injury, we evaluate gene expression changes between before and after rehabilitation/disuse by combining selective nuclear/cellular sorting of motor neurons and transcriptome analysis using next-generation sequencer. Aft er the complete transection of spinal cord at mid-thoracic level, we collected motor neurons located in th e level of lumbar intumescence with laser micro dissection at three months after injury, and performed gen e expression analysis. This method will contribute to identify the possible biomarkers for establishment o f efficient rehabilitation programs.

研究分野: 総合領域

科研費の分科・細目: 人間医工学 ・ リハビリテーション科学・福祉工学

キーワード: リハビリテーション医学 ギガシークエンサー

1.研究開始当初の背景

わが国に於いて脳卒中は3大死亡原因のひ とつであるが、実際は死亡に至るケースより もむしろ麻痺等の重篤な後遺症を抱え、周囲 の介護を要するケースが数多く見られる。事 実、脳卒中は寝たきり要因の第1位であり、 今後も人口の高齢化とともに発症数は年々 増加すると予測されており、健康社会の実現 のためには予防はもちろんのこと、脳卒中患 者の社会復帰を目的としたリハビリテーシ ョン医療が今後さらに重要性を増してゆく のは間違いないと考えられる。しかし、脳卒 中や脊髄損傷などの中枢神経障害に対する リハビリテーション効果は現状では十分と 言えず、その効果判定基準が経験則に基づく ため、リハビリテーションのプロトコルやメ カニズムを科学的に客観的に検証すること は困難であった。特に、これまでにリハビリ テーションの評価を分子生物学的な解析と 結びつけた研究は数少ない。

2.研究の目的

本研究の目的は、齧歯類中枢神経損傷モデ ルと独自に開発した細胞・細胞核回収技術な らびにハイスループット解析技術を組みあ わせて、リハビリテーション等の四肢自動他 動運動が中枢神経運動ニューロンに与える 変化を分子生物学的に評価することである。 特に、次世代シークエンサーを用いた発現遺 伝子変化の網羅的解析により、将来的にはリ ハビリテーションの効率評価となりうる指 標の同定に繋げることを目標とした。

3.研究の方法

実験の方法は、C57B16マウス(8週齢、雌) に対して腹腔内麻酔薬投与により全身麻酔 を行った後、大脳皮質組織を摘出した後、ト リプシン等で酵素処理した後に、脱核誘導剤 サイトカラシンDを添加することにより核を 取り囲むアクチン骨格のみを脱重合させ、ホ モジナイザー処理により核のみを抽出する。 運動ニューロン核を選択的にセレクション するため、ChAT や HB9を指標として免疫染 色を行い、セルソーター(Aria2)にて運動 ニューロンの核のみを回収する。また、代替 法として、Emx-Cre マウスや Islet1-GFP トラ ンスジェニックマウス等の運動ニューロン 選択的に GFP を発現させた遺伝子改変マウス から GFP 陽性核のみを FACS で採取し、運動 ニューロン核を選択的に回収する計画を立 てた。抽出したサンプルから mRNA を採取し、 次世代シークエンサーを用いてトランスク リプトーム解析が可能かどうかを検討した。 リハビリ前後でのトランスクリプトーム解 析を行うために、Robotech 社製トレッドミル 装置を用いてマウスに下肢強制他動運動を 行い、運動ニューロンに於ける発現変化を網 羅的に抽出することを試みた。解析途中で、 運動ニューロンからの採取核からサイズの 小さい分子の漏れだしが問題となったため、

核による選別よりも細胞自体を選択的に採 取する必要性があると考えられ、さらに脳梗 寒モデルよりも下肢完全麻痺モデルが解析 に適していると判断したため、マウス第9胸 髄を完全切断し下肢完全麻痺モデルを作成 した。脊髄前角部に於いては大脳皮質と同様 に細胞核回収では mRNA の leaking が著しい と判断されたため、第1腰髄部(膨大部)に 於ける運動ニューロンを選択的にレーザー マイクロダイセクションを用いて採取し、発 現遺伝子の解析を行った。トランスクリプト ーム解析は illumina 社製 SolexaGA または Hi-Seq を用いてシークエンスした後、Tophat ならびに Cufflinks を用いてマッピングなら びにアノテーションを行い、発現の強度は FPKM で比較定量した。

4.研究成果

我々は成体哺乳類の脳や脊髄から細胞核 のみを選択的に採取し、核内タンパク質を指 標としてセルソーターを用いたニューロン やグリアの選択的解析法を確立し、2011年に 報告した(Okada et al., Flow cytometric sorting of neuronal and glial nuclei from central nervous system tissue. J Cell Physiol. 226:552-, 2011)。本研究では、こ の方法に基づいて成体マウス大脳皮質より 核を抽出し、運動ニューロン核の選択的採取 を試みた。論文のとおり核の採取自体に問題 はなく、また HB9 抗体や ChAT 抗体を用いた 運動ニューロン選択的な採取核の免疫染色 も可能であった。これらの核を FACS にて回 収し発現遺伝子の解析を行ったが、リアルタ イム PCR を行い GAPDH 等のハウスキーピング 遺伝子の発現を定量したところ、時間の経過 とともにmRNAの漏出が認められ、核内のmRNA 量が極端に減少することが明らかとなった。 これは、GFP トランスジェニックマウスを用 いた解析に於いても同様であり、指標となる GFP 蛋白すら格外へ漏出してしまうため、い かなる GFP マウスを用いても同様の結果にな ることが推測された。すなわち、65Kd以下の 分子(mRNA ならびにタンパク質)は本方法で は運動ニューロン選択的に核を採取できて もその解析は殆ど困難であり、また mRNA 自 体も核外リボソーム部の方が豊富であると 考えられた。そこで方針を切り替え、レーザ ーマイクロダイセクションを用いた運動二 ューロンの選択的回収を試みた。大脳皮質領 域では運動野に於いてもどのニューロンが 運動ニューロンであるかの同定が困難であ ったため、その形態から比較的分かり易い脊 髄腰膨大部に焦点を当て解析を行うことと した。まず、成体マウスを経心臓的にホルマ リンで環流固定を行った後、同部位での axial 切片を作成、Nissle 染色を行った後に 前角部の Nissle 陽性大型細胞をレーザーマ イクロダイセクション顕微鏡下に採取、発現 遺伝子の確認を行った。無固定サンプルを用 いた免疫染色後であっても細胞の選別と回

収、ならびに回収細胞での RT-PCR は可能で あった。これらの手法を用いて下図の如く、 選択的に運動ニューロンを採取できている ことを確認した。





次に、リハビリテーションによる効果を確認 する前段階として、逆に四肢からの運動入力 が途絶えた影響が運動ニューロンにどのよ うな分子変化をもたらすのかを解析するた めに、第9胸髄完全切断後、3ヶ月の時点に 於ける運動ニューロンでの mRNA 発現変化の 解析を試みた。組織切片解析を行ったところ、 完全切断後3ヶ月で上位ニューロンからの入 力が全く断たれた状態に於いても運動ニュ ーロン数に変化はなく、灰白質も萎縮は殆ど 認められなかったが、白質に於いては後索を 中心として著明な萎縮が認められ、脊髄前角 部でのセロトニン陽性線維も有意に減少し ていた。免疫染色を行ったところ、Bassoon を中心としたプレシナプスタンパク質の発 現は有意に減少しており、特に興奮性シナプ ス関連タンパク質の発現が有意に減少して いた (下図)。



採取した運動ニューロンから mRNA を採取し、 切断前後でのシナプス関連タンパク質、軸索 輸送タンパク質、神経伝達物質受容体、神経 活動マーカー等の発現遺伝子を解析した。特 に、脊髄損傷後の下肢他動運動によるリハビ リテーションは損傷部位での BDNF の発現を 増加させ運動機能回復を促進させるとの報 告(Joseph MS et al., Treadmill trainings stimulates BDNF mRNA expression in motor neurons of the lumbar spinal cord in spinally transected rats. Neuroscience 2012)があり、トランスミッターそのものと 合わせて受容体の発現はリハビリテーショ ンの意義そのものとの関連が大きいと考え られた。その結果、一部の結果を下図に示す とおり、シナプス関連タンパク質においては ポストシナプス蛋白の発現は維持されてい ることが明らかとなった。また、シナプス蛋 白を輸送する軸索輸送蛋白の発現は脊髄切 断運度ニューロンで一部発現が亢進してお り、上位からの入力が途絶えた状態でも運動 ニューロン自体は何とか機能を維持するべ く機能しているものと考えられた。



c-fos や CaMK2 などの神経活動マーカーの一 部では確かに有意な減少が認められたが、神 経栄養因子受容体やニューロトランスミッ ターの発現が維持されていたことからもそ のことは窺える。



これらの知見と、強制歩行リハ後の運動ニュ ーロンでの発現変化を併せることで、より正 確にリハビリテーションが運動ニューロン へ与える分子的変化を解析できるものと考 えられる。

また、次世代シークエンサーを用いた網羅 的発現遺伝子の解析については、ハイクオリ ティーRNA が 1ug 必要であるため、レーザー マイクロダイセクションによる細胞回収で は膨大なサンプル数が必要となり、現在次世 代シークエンサーの後継機種により必要サ ンプル RNA 量を減じる試みを行っている段階 である。トランスクリプトーム解析そのもの の手技は完全に確立し、実際に損傷脊髄中に 神経幹細胞を移植し、移植後7日目に生着細 胞のみを選択的に FACS で回収、回収サンプ ルでのトランスクリプトーム解析を実施す ることに成功した(Kumamaru et al., Nature Communications,3:1140-, 2012)。下図の如 く、1 サンプルあたり 25,000,000 個以上のタ グのリーディングと 12,000 種類の発現遺伝 子の定量化が可能であり、発現絶対量が比較 できるため、リハビリテーション前後での運 動ニューロンでのトランスクリプトーム解 析により、実際の発現遺伝子変化をマイクロ アレイのような相対変化ではなく、絶対的定 量できることを確認した。



このように直接的なリハビリ効率の効果 判定に繋がる遺伝子の同定には至っていな いが、バイオインフォマティックスと新規解 析技術の融合による本研究成果は、リハビリ テーションが特定の運動ニューロンにもた らす分子的変化を網羅的に解析することが 可能となる技術の確立に繋がった。以上の成 果は Nature Communications, Journal of Neurochemistry, American Journal ٥f Pathology. Stem Cells. Journal οf Neuroinflammation, Journal of Cellular Physiology, Spine などを始めとした査読付 き国際英文雑誌に 20 編以上掲載され、リハ ビリテーション科学の研究推進に大きく資 するものと考えている。

5.主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計23件)

- Saiwai H, Kumamaru H, Ohkawa Y, Kubota K, Kobayakawa K, Yamada H, Yokomizo T, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Ly6C+Ly6Gmyeloid-derived suppressor cells play a critical role in the resolution of acute inflammation and the subsequent tissue repair process after spinal cord injury. J Neurochem. 125:74-88,2013.doi:10.1111/jnc.1213 5.
- Matsumoto Y, Takahashi Y, Harimaya K, Nakagawa T, Kawaguchi K, <u>Okada S</u>, Hayashida M, Doi T, Sakamoto Y, Matsunobu T, Oda Y, Iwamoto Y. Dedifferentiated chondrosarcoma of the cervical spine: a case report. World J Surg Oncol. 11:32-37, 2013.doi: 10.1186/1477-7819-11-32.
- Kubota K, Doi T, Murata M, Kobayakawa K, Matsumoto Y, Harimaya K, Shiba K, Hashizume M, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>.

Disturbance of ribcage development causes progressive thoracic scoliosis: The creation of a nonsurgical structural scoliosis model in mice. J Bone Joint Surg. 95:e1301-7, 2013.doi: 10.2106/JBJS.L.01381.

- Kumamaru H, Kobayakawa K, Saiwai H, Kubota K, Yokota K, Ohkawa Y, Shiba K, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. The therapeutic activities of engrafted neural stem/progenitor cells are not dormant in the chronically injured spinal cord. Stem Cells. 31:1535-47, 2013.doi: 10.1002/stem.1404.
- Matsumoto Y, Harimaya K, Doi T, <u>Okada</u> <u>S</u>, Hayashida M, Iwamoto Y. Minimum five-year follow up of selective anterior thoracolumbar or lumbar fusion for adolescent idiopathic scoliosis. J Spine Res. 4:933-40, 2013.
- Takao T, Morishita Y, <u>Okada S</u>, Maeda T, Katoh F, Ueta T, Mori E, Yugeu I, Kawano O, Shiba K. Clinical relationship between cervical spinal canal stenosis and traumatic cervical spinal cord injury without major fracture or dislocation. Eur Spine J. 22:2228-31, 2013.doi: 10.1007/s00586-013-2865-7.
- Matsumoto Y, Fujiwara T, Imamura R, 7. Okada Y, Harimaya K, Doi T, Kawaguchi K, Okada S, Yamada Y, Oda Y, Iwamoto Y. Hematoma of the ligamentum flavum in the thoracic spine: report of two cases and possible role of the transforming growth factor beta-vascular endothelial arowth factor signaling axis in its pathogenesis. J Orthop Sci. 18:347-54, 2013. doi:

10.1007/s00776-011-0150-3.

- Kumamaru H, Ohkawa Y, Saiwai H, Yamada H, Kubota K, Kobayakawa K, Akashi K, Okano H, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Direct isolation and RNA-seq reveal environment-dependent properties of engrafted neural stem/progenitor cells. Nat Commun. 3:1140-, 2012. doi: 10.1038/ncomms2132.
- Yugué I, <u>Okada S</u>, Ueta T, Maeda T, Mori E, Kawano O, Takao T, Sakai H, Masuda M, Hayashi T, Morishita Y, Shiba K. Analysis of the risk factors for tracheostomy in traumatic cervical spinal cord injury. Spine. 37:E1633-8, 2012. doi: 10.1097/BRS.0b013e31827417f1.

10. Maeda T, Ueta T, Mori E, Yugue I,

Kawano O, Takao T, Sakai H, <u>Okada S</u>, Shiba K. Soft-tissue damage and segmental instability in adult patients with cervical spinal cord injury without major bone injury. Spine. 37:E1560-6, 2012. doi: 10.1097/BRS.0b013e318272f345.

- Kumamaru H, Saiwai H, Kobayakawa K, Kubota K, van Rooijen N, Inoue K, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Liposomal clodronate selectively eliminates microglia from primary astrocyte cultures. J Neuroinflammation. 9:116-, 2012. doi: 10.1186/1742-2094-9-116.
- Harada A, <u>Okada S</u>, Konno D, Odawara J, Yoshimi T, Yoshimura S, Kumamaru H, Saiwai H, Tsubota T, Kurumizaka H, Akashi K, Tachibana T, Imbalzano AN, Ohkawa Y. Chd2 interacts with H3.3 to determine myogenic cell fate. EMBO J. 31:2994-3007, 2012. doi: 10.1038/emboj.2012.136.
- Kubota K, Saiwai H, Kumamaru H, Kobayakawa K, Maeda T, Matsumoto Y, Harimaya K, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Neurological recovery is impaired by concurrent but not by asymptomatic pre-existing spinal cord compression after traumatic spinal cord injury. Spine. 37:1448-55, 2012. doi: 10.1097/BRS.0b013e31824ffda5.
- Hara-Miyauchi C, Tsuji O, Hanyu A, <u>Okada S</u>, Yasuda A, Fukano T, Akazawa C, Nakamura M, Imamura T, Matsuzaki Y, Okano HJ, Miyawaki A, Okano H. Bioluminescent system for dynamic imaging of cell and animal behavior. Biochem Biophys Res Commun. 419:188-93, 2012. doi: 10.1016/j.bbrc.2012.01.141.
- 15. Kubota K, Saiwai H, Kumamaru H, Maeda T, Ohkawa Y, Aratani Y, Nagano T, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Myeloperoxidase exacerbates secondary injury by generating highly reactive oxygen species and mediating neutrophil recruitment in experimental spinal cord injury. Spine. 37:1363-9, 2012. doi: 10.1097/BRS.0b013e31824b9e77.
- Mori E, <u>Okada S</u>, Ueta T, Itaru Y, Maeda T, Kawano O, Shiba K. Spinous process-splitting open pedicle screw fusion provides favorable results in patients with low back discomfort and pain compared to conventional open pedicle screw fixation over 1 year after surgery. Eur Spine J. 21:745-53, 2012. doi: 10.1007/s00586-011-2146-2.

- 17. Matsumoto Y, Harimaya K, Doi T, Kawaguchi K, <u>Okada S</u>, Inoguchi A, Fujiwara M, Iwamoto Y. Clinical characteristics and surgical outcome of the symptomatic ossification of ligamentum flavum at the thoracic level with combined lumbar spinal stenosis. Arch Orthop Trauma Surg. 132:465-70, 2012. doi: 10.1007/s00402-011-1438-7.
- Kubota K, <u>Okada S</u>, Maeda T, Matsumoto Y, Sakamoto A, Harimaya K, Saiwai H, Kumamaru H, Oda Y, Iwamoto Y. Extradural nodular fasciitis arising in the spinal canal. Spine.37:E133-7, 2012. doi: 10.1097/BRS.0b013e318224568a.
- Kumamaru H, Saiwai H, Ohkawa Y, Yamada H, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Age-related differences in cellular and molecular profiles of inflammatory responses after spinal cord injury. J Cell Physiol. 227:1335-46, 2012. doi: 10.1002/jcp.22845.
- 20. Tanaka M, Shiota M, <u>Okada S</u>, Harada A, Odawara J, Mun S, Iwao H, Ohkawa Y. Generation of a rat monoclonal antibody specific for hsp72. Hybridoma. 30:397-400, 2011. doi: 10.1089/hyb.2011.0015.
- 21. Odawara J, Harada A, Yoshimi T, Maehara K, Tachibana T, <u>Okada S</u>, Akashi K, Ohkawa Y. The classification of mRNA expression levels by the phosphorylation state of RNAPII CTD based on a combined genome-wide approach. BMC Genomics. 12:516-, 2011. doi: 10.1186/1471-2164-12-516.
- 22. Renault-Mihara F, Katoh H, Ikegami T, Iwanami A, Mukaino M, Yasuda A, Nori S, Mabuchi Y, Tada H, Shibata S, Saito K, Matsushita M, Kaibuchi K, <u>Okada S</u>, Toyama Y, Nakamura M, Okano H. Beneficial compaction of spinal cord lesion by migrating astrocytes through glycogen synthase kinase-3 inhibition. EMBO Mol Med. 3:682-96, 2011. doi: 10.1002/emmm.201100179.
- 23. Fujiwara T, Fukushi J, Yamamoto S, Matsumoto Y, Setsu N, Oda Y, Yamada H, <u>Okada S</u>, Watari K, Ono M, Kuwano M, Kamura S, Iida K, Okada Y, Koga M, Iwamoto Y. Macrophage infiltration predicts a poor prognosis for human ewing sarcoma. Am J Pathol. 179:1157-70, 2011. doi: 10.1016/j.ajpath.2011.05.034.

[学会発表](計14件)

<u>岡田誠司</u>、熊丸浩仁、久保田健介、小早 川和、幸博和、岩本幸英.脊髄損傷研究 に於ける網羅的遺伝子解析の応用.第 26 回日本整形外科学会基礎学術集会 (2011.10.20-21前橋) <u>岡田誠司、熊丸浩仁、久保田健介、小早</u> 川和、中村雅也、Renault-Mihara Francois、岡野栄之、岩本幸英.脊髄損 傷後の自己修復メカニズム.第27回日 本整形外科学会基礎学術集会 (2012.10.26-27名古屋) <u>岡田誠司</u>、幸博和、熊丸浩仁、久保田健 介、小早川和、岩本幸英.脊髄損傷研究

に於ける MDSC(myeloid-derived suppressor cell)の生理的修復作用. 第27回日本整形外科学会基礎学術集会 (2012.10.26-27名古屋)

<u>岡田誠司</u>、熊丸浩仁、小早川和、横田和 也、斉藤武恭、岩本幸英.慢性期脊髄損 傷に対する神経幹細胞移植.第28回日 本 整 形 外 科 学 会 基 礎 学 術 集 会 (2013.10.17-18 千葉)

<u>岡田誠司</u>、熊丸浩仁、林田光正、松本嘉 寛、播广谷勝三、岩本幸英. セルソータ ーの脊髄再生研究への応用. 第42回日 本脊椎脊髄病学会 (2013.4.25-27 沖 縄)

<u>岡田誠司.</u>脊髄圧迫病変が脊髄損傷の予 後に与える影響.第46回日本脊髄障害 医学会(2011.11.18-19大阪)

<u>岡田誠司</u>.損傷脊髄部での移植神経幹 細胞の in situ analysis.第46回日本 脊髄障害医学会(2011.11.18-19大阪)) <u>岡田誠司.</u>脊髄損傷に対する治験-ステ ロイド大量療法の歴史から学ぶ.第48 回日本脊髄障害医学会(2013.11.14-15 福岡)

Kumamaru H, Saiwai H, Iwamoto Y, <u>Okada</u> <u>S</u>. Age-related differences in cellular and molecular profiles of inflammatory responses after spinal cord injury. The 41th Annual Meeting of Society for Neuroscience (Nov 12-16, 2011, Washington DC, USA)

Saiwai H, Kumamaru H, Kubota K, Kobayakawa K, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Delivery of Ly6C(+) myeloid-derived suppressor cells (MDSCs) promote tissue repair process and functional recovery after spinal cord injury. The 41th Annual Meeting of Society for Neuroscience (Nov 12-16, 2011, Washington DC, USA)

Kobayakawa K, Saiwai H, Kumamaru H, Kubota K, Ohkawa Y, Shiba K, Yokota Y, Iwamoto Y, <u>Okada S</u>. Hyperglycemia-induced microglial overactivation deteriorates the secondary injury via NF- B pathway after spinal cord injury. The 43th Annual Meeting of Society for Neuroscience (Nov 9-13, 2013, San Diego, USA) Yokota K, Kobayakawa K, Iwamoto Y, Okada S. Structural and functional changes of distal site to the lesion after chronic complete spinal cord injury. The 43th Annual Meeting of Society for Neuroscience (Nov 9-13. 2013, San Diego, USA) Kobayakawa K, Kubota K, Iwamoto Y, Okada S. High glucose-induced microglial activation deteriorates the secondary injury via NF-kB pathway after experimental spinal cord injury.ORS 2013 Annual Meeting (Jan 26-29, 2013, San Antonio, USA) Kubota K, Doi T, Kobayakawa K, Matsumoto Y, Hariimaya K, Iwamoto Y, Okada S.Neurological recovery is impaired by concurrent but not by asymptomatic pre-existing spinal cord compression after traumatic spinal cord injury. ORS 2013 Annual Meeting (Jan 26-29, 2013, San Antonio, USA)

〔図書〕(計1件)

Okada S. The mechanism behind functional recovery after the incomplete spinal cord injury. Neuroprotection and Regeration of the Spinal Cord. In Uchida K, Nakamura M, Ozawa H, Katoh S (eds):3-10.Springer, 2014. ISBN 978-431-54501-9

〔産業財産権〕 出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 http:hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/de tails/K003217

6.研究組織

(1)研究代表者 岡田 誠司 ((

 岡田 誠司 (OKADA SEIJI)

 九州大学·医学研究院·准教授

 研究者番号:80448430